

日本 「けしからん」人々のリアルを追って  
**コロナルポ・夜の街**

独占取材  
トランプを操る  
娘婿の次の一手

南シナ海  
中越石油争奪戦  
ベトナムの屈辱

ニュースウィーク日本版

定価480円

# Newsweek®

**ルポ** 新宿歌舞伎町

# 「夜の街」のリアル

コロナでやり玉に挙がる  
歌舞伎町のホストクラブは本当に  
「けしからん」存在なのか

**PLUS**

押谷教授独占インタビュー

石戸 諭

(ノンフィクションライター)

新宿・歌舞伎町でホストクラ  
ブを経営する「Smappa!  
Group」会長の手塚マキ  
(中央)とホストたち

2020

**8・4**



# あらゆる技術や方法を使いながら、腰痛に悩むすべての人を助けたい。

## 腰

の病は最新の検査と手術でその多くが治る可能性がある一方、「腰痛は治らない」と決めつけてしまっている人も少なくないのではないだろうか。そんな現状を打破するため、日本国内で、あえて整形外科分野で保険診療に加えて、自費診療にまで取り組む病院がある。腰痛と奮闘する、院長の伊藤全哉氏に話を聞いた。

「背骨、腰は体の大黒柱、痛みが我慢できなくなると動けなくなってしまう。また、手術なしで治療できたはずの腰痛も、悪化してしまうと手術するしかなくなる、という例も少なくありません。まずは、悪化する前に来院してほしい。腰痛が治らないのは過去の話で、現在は腰痛の9割近くは治る可能性がある」と伊藤氏は考えています。

腰痛に関する診断を早く、正確に下すために、あいちせほね病院はMRIを4台、そのほかレントゲン、CTを加えた検査設備を導入している。たとえば脊椎の精密検査を行う場合、1〜2か月かかる病院もあるが、当院の脊椎ドックと呼ばれる検査では、1日で済ませることができるとのこと。

「MRI、CT、レントゲンは医療保険制度上、一度に検査を行うことが難しいです。最大3回も来院することになり、患

者さんはその間ずっと痛みを抱えたままです。当院では自費診療と保険適用の診療の違いをきちんとご説明した上で、自費診療をお選びいただいた患者様には一度に検査を行って診断を下し、手術が必要ならば次回の来院で行います。たった2日の来院で済ませる一発診断の一発治療です。これは圧倒的なスピードの違いだと自負しています」。

こうした独自の取り組みは検査だけにとどまらず、手術についても、海外から最新の術式を取り入れて活用している。

アメリカへの留学経験もある伊藤氏の印象では、整形外科技術に関して、日本はアジア諸国やアメリカに大きく先を越されている。そして、腰部の手術は、内視鏡を使った低侵襲治療がメインとなっているが、その技術は海外でも目を追うことに進化している。

「現在、日本で認可されているのは16ミリと7ミリの内視鏡治療ですが、私は3ミリのものも使用します。患者さんの多くは高齢者ですから、体の負担を軽減するよう心掛けなければなりません。そのためベストな選択とは何なのか。そこを突き詰めて考えた結果、一般に国内で使われている内視鏡より細いものを使って手術を行うべきだ

という結論に至りました」。

伊藤氏の見解では、日本の保険診療の範囲は狭く、海外の新しい技術は保険適用になるまで相当な時間がかかる。現場の実情に対し、医療行政のスピード感が圧倒的に足りていないため、新技術を採用するとなると、自費診療にするしかないのが現状だ。同院で行っている1日検査や内視鏡治療などは、日本でもまだ認可しづらいため、自費診療となるが、その治療を求めて遠方からの問い合わせもあるという。

「最新の技術でより早く患者さんを助けたい。この理想を追求するために、自費診療という選択肢も取り入れていくことは必要だと思っています。保険適用外なので、費用はかかりますが、その分新しい技術、最新の検査機器での医療を貫いています」。

## 最

新情報を入手し、実際の治療に役立てるため、当院はさまざまな活動を展開している点にも注目したい。毎年、海外の脊椎関連の医師を100名ほど招き、学術発表の場を設けているのだ。

これは地域の個人病院としてはもちろんのこと、学会等を含めて考えても、その規模は決して小さくない。韓国、中国、アジア、欧米の医師を招いて、最

新の知見を発表する場を設けているのだ。専門知識を共有することで、医師たちはお互いに高めあうことができるだけでなく、日本人医師への啓蒙活動にも繋がると伊藤氏は考えている。

「私自身は、今でも年6回ほど海外学会活動を行っています。整形外科の分野は論文を読んだだけではわからないことも多い。実際に現地に足を運んで手術に触れる。知識だけでなく、現場の実地経験が大切だと実感します。こうした経験を積み重ねることで、自分の引き出しを増やしていきたいですね」。

心身一如、これが伊藤氏の医療に対する基本スタンスだ。ただ病気を治すだけでなく、患者の心まで治すことを追求し続け

ている。

「若い頃に先輩医師に西洋医学、東洋医学、そして心理学の3つを極めればすべての病が治せると言われたのです。それが心に残っていて、今も忠実にその教えを守っています。医師の多くは理系ですから、原点を忘れて器材や投薬に走りがちです。しかし、私は医師とは文系要素も多分にある職業だと思っています。医学だけでなく患者の心まで診る。あらゆる技術や方法を使って、この世から腰痛をなくしていきたいと思っています。拔苦与楽、すなわち患者の苦悩を除き安楽を得る。これが私達の医療の原点です」。

伊藤氏のさらなる活躍、そして挑戦の先に見える未来に今後

# CHALLENGER

ITO ZENYA

医療法人全医会あいちせほね病院 院長

## 伊藤全哉

1998年、名古屋大学医学部卒業。名古屋大学附属病院などで研鑽を積み、先進技術を学ぶべく渡米。帰国後の2016年、伊藤整形・内科あいち腰痛オペクニック副院長に就任。17年、あいちせほね病院開院。日本整形外科学会専門医。日本協公認スポーツドクター。

The Extra Edge

世の中のトレンドをリードする話題のモノ、ヒト、コトなどを紹介